№	提　　案　　名	提 案 団 体 名	
		代表者氏名	所　　属
2	和の文化とまちづくり －「宮染め」が彩るまちづくり－	宇都宮共和大学 シティライフ学部松本ゼミ	
		大橋　直哉	宇都宮共和大学　シティライフ学部

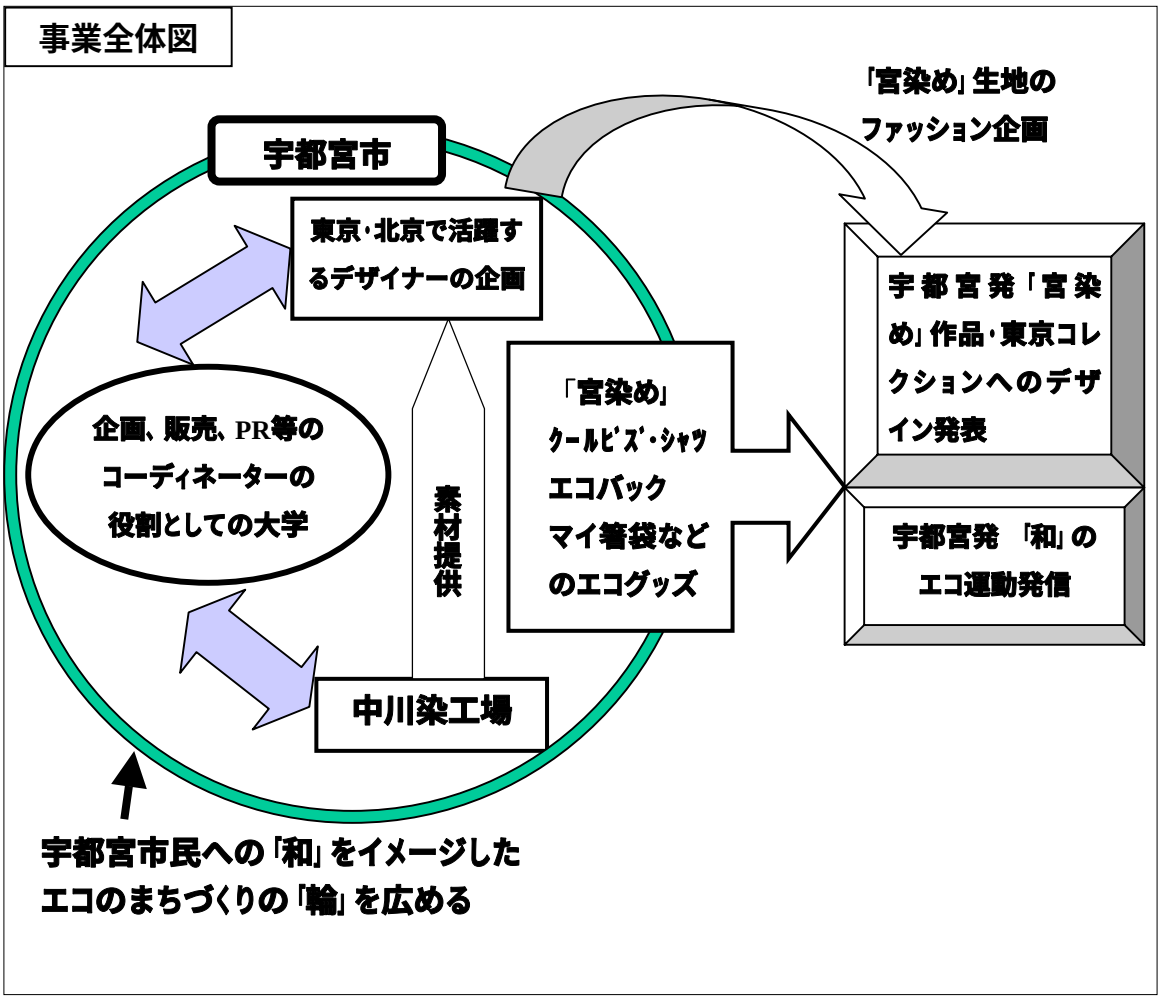
指導教員 氏　　名	松本　晃子

１．提案の要旨

【目標】

宇都宮の田川にかかる橋に「洗橋（あらいばし）」という名称が残っている。江戸時代末期に真岡市で織られた木綿地を染めるために、宇都宮市周辺で染色が行われ、田川で洗いの作業が行われた。最盛期には江戸の呉服問屋の扱いの６割も占めていた時期もあったにも関わらず、明治期に入って大幅な減産に追い込まれて消滅していった真岡木綿であるが、染めの技術は今日まで残ってきたのである。中でも伝統工芸としての「宮染め」は注染という技術をかたくなに守り、これまで多くの有名力士の浴衣や和手ぬぐいを染めてきた。

宇都宮市内に残る「宮染め」の中川染工場の職人芸の作品に、現代の若者の力を加えることにより、宇都宮市の伝統を江戸時代のエコロジーと彩りを感じさせる「宮染め」を活用したまちづくりをめざす。



【現状と課題】

・宇都宮にはパルコやオリオン通り･ユニオン通りにおける洋服文化のお店があるものの、全国に広められるほどの差別化した店舗や商業地区になっていない。しかし、路地裏には呉服関係の店など伝統のある店が存在し、田川沿いには伝統工芸の指定を受けた「宮染め」を行う中川染工場があり、有名力士たちの浴衣を染めてきた。

・宇都宮には「宮祭り」という大規模な祭りがあるにも関わらず、浴衣の「宮染め」はあまり知られていない。

・有名力士たち（『大鵬』『曙』『小錦』『豊真将』等）の浴衣を染め、最盛期には力士の 8 割の浴衣を染めてきた中川染工場ではあるが、「宮染め」を作る職人の高齢化が進んでおり、宇都宮に育った伝統工芸を受け継ぐ職人の存続が難しくなっている。

⇩

・ 夏に浴衣を着用する若者は増えており、今年は男性の着用も東京中心に広まっている。

・ 和手ぬぐい専門店が販売店を増やしており、熟年世代にはギフトとして、若者世代には新しいイメージのハンカチ代わりにおしゃれなアイテムとして和手ぬぐいが静かなブームとなっている。(注 1)

・ こうした浴衣や和手ぬぐいを若者が受け入れ始めている時代背景をうまくつかみ、日本の心、「和」をイメージできるアイテムを市民に広め、また、国際的にも広めることが出来ないであろうか。

【施策事業の提案】

―「和」による市民の「輪」を広め、宇都宮発の日本の文化を国際的にも広める。―

大学と地域が連動し、新しい「宮染め」、即ち学生のアイディアによるクールビズ・シャツやエコバック、マイ箸入れ袋などによって、江戸時代のエコを意識させ、「和ごころ」に富んだ商品開発を行い、宇都宮市の新しい観光イメージをつくりあげる。

２．提案の目標

若者が夏の祭りに浴衣を男女で着るニーズや、和手ぬぐいの専門店のブームなどの背景から、伝統工芸＝「古きよきもの」といっただけの和の文化を、若者の手によって現代に復活・活性化させる方法を考察する。

また、宇都宮ならではの「宮染め」を浴衣や和手ぬぐいに限らず、クールビズ・シャツなどに応用して、宇都宮市の環境にやさしい街というアピールの一翼を、人々にとっての“まちの彩り”という側面から担っていきたい。